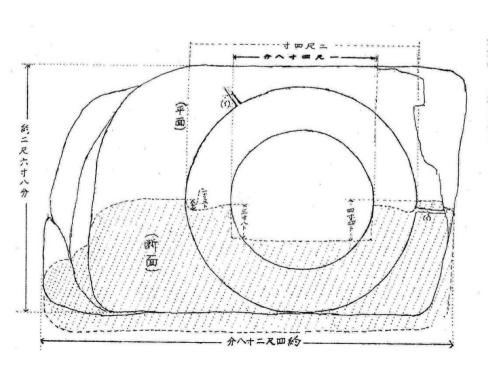
三重塔心礎 天智年間







法海寺 心礎見取図

法海寺の心礎の遺瓦

重

める孔を有しないが、何れ柱の内に舎利を納められたであろう)。 法海寺の塔婆心礎の様式は、自分の心礎分類に依ると、柱当 (擦柱) 切込凹枘孔式である。 (心礎には舎利を納

三河より船便に依って師崎を迂廻して輸送されたのか、或は陸送されたのか遽かに推定困難である。 墳の石槨は美濃河戸産の硬質砂岩を用いているが、この心礎の産地は三河であることは注目すべきである。而して この心礎の石質は花崗岩の組織微粒であり、其の産地は三河矢作川岸である。此地方(八幡町、 横須賀町)の古

法海寺儀軌にある天智天皇御字時代のものとしても差支なく-----何れにしても奈良時代のも

のである

この心礎の時代は、

この心礎の原位置も不明である。 に就いては、 目瓦が出土したとのことであり、また同寺境内には心礎と石質を同じくする創建当時の礎石と思われるものが数個 はもと法海寺の境内であったと伝承されている。しかし同所の古老の話に依れば現在の法海寺境内より、多くの布 ないが、現在の法海寺南方の小高いところに国民学校があり、その丘下の水田に清水の涌出るところがある。ここ この心礎の原位置に就いては、 桃山時代再建と思われる本堂の礎石もまた同質で旧礎石と思われるものが利用されている。法海寺の旧山 色々と憶測されてはいるが、その位置推定には有力な資料を発見せざるに於ては困難である。従って 同寺儀軌に見えている『山階清水ノ山岡』は何處を指すものであるか判然とはし

坂

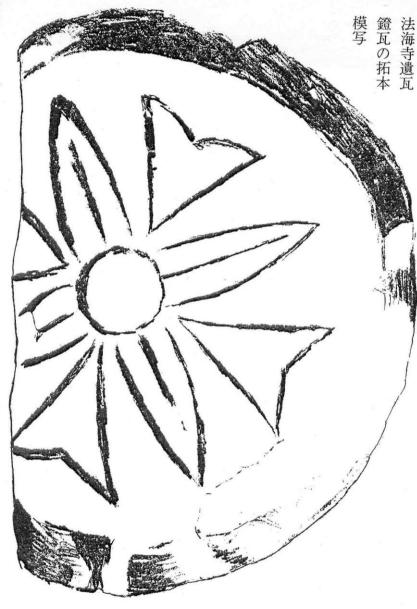
吉

対しては未だ反駁されていないようである……が、茲に私の軽率を謝し、訂正して置きたい。 べたのであるが、それはウガチ過ぎた結果の誤認であって、枘孔は創造時代其儘のものである。 ゲ工合で、この心礎が水盤に利用される際石工に依って枘孔が拡げられたものと思い、『考古学』誌上に愚考を述 硬石または金物等で叩いてあるので、前述した如く目スキであるが故に、幾重にも薄く上場へへゲている。 時代、其の柱当切込のところが、子供等の悪戯に據って、瓦、石等で水磨されているところへ、枘孔の上角が、 火災を蒙っているので、柱当切込のところがところどころへゲて凹凸をなしている。なお、水盤に利用されていた に利用されていたそうである。而してこの心礎は材石(切石)を採り得ざる程の目スキで、而も山傷多く、その上 この心礎は現在本堂の向って右前に石柵を設け保存されているが、その以前は現在の本堂の雨垂れ落受(水盤 私の真実の愚考に

戴いた。それは鐙瓦であって、文様の様式は、日本内地では未だ見受けざる特種のものであった。永らく望待して 地方を見学することになったので、同町の旧家であり、郷土史家である堀田氏を訪れた。その際法海寺遺瓦に就 ぬることを、毎つも忘れなかった。-----学界未知であり、また一般に知られていないからである。 いた瓦が見学し得られ、而も特種の文様であったので、二重の嬉であった。 て尋ねたところ、同町の浜岡氏が所持していられることが判明したので、堀田氏から頼んで頂き、後日拝観させて 法海寺を訪れること六、七回に及んでいるが、その都度同寺の遺瓦で文様を有するものに付て、誰れ彼れとなく尋 -----此度八幡町

と同時代即ち奈良時代であると思う。 るもので、 さてこの鐙瓦の文様は、十字花形と雙葉形の変化したものと思われ、その系統は遠く中国の唐時代迄溯らしめ得 朝鮮の高句麗時代の遺瓦の文様の系統に属するものであると考える。 この法海寺遺瓦の時代は同寺心礎

その真偽は兎も角、洵に興味深いものがある。法海寺の瓦窯址と思われるところが、隣町横須賀町大字高横須賀地 而して、勿論鵜吞みにすべきではないが、同寺儀軌は開基を新羅國之明信王太子道行法師であるといっている。



字瓦山附近に 存するので、 調査したが、 温査研究した 上で、報告す ることにした

寸八分五厘)

